

東日本大震災復興支援

# あゆみプロジェクト

2012.4～2012.11

2011.3.11

わたしたちは、高校生だった。



## 序

## 章

# 序 章



## KEYWORD

学生ボランティア

日本財団

教育事業部事業課長兼指導主幹

西尾 雄志

09

第一章「始まりの春」

10

第二章「決意」

18

第三章「焦燥」

26

第四章「風土」

25

第五章「大分の風土」

17

第六章「プロジェクトから学んだこと」

33

第七章「あゆみプロジェクト」と人間力教育

49

日本文理大学

セブンイレブン記念財団

経営経済学部 経営経済学科1年

須賀流星

09

日本文理大学

人間力育成センター副センター長

高見 大介

09

第八章「子どもキャンプ」

26

第九章「再会、明日へ」

18

第十章「最後の夏」

04

2012年4月、桜咲き誇るNBU日本文理大学のキャンパスに集う新1年生。溢れる笑顔、少し緊張しているような佇まい。それは入学式のいつもの風景だった。同じ頃、NBUと<sup>(☆1)</sup>日本財団学生ボランティアセンター（以下、ガクボ）は、調印書を交わす。東日本大震災における被災地支援活動の提携が約束された。

2011年3月11日に起きた東日本大震災。各地に大きな被害と深い哀しみをもたらした未曾有の大惨事のなかで、NBUは、震災直後から<sup>(☆2)</sup>人間力育成センター（以下、センター）が中心となり、学生が自主的に行う「<sup>(☆3)</sup>絆プロジェクト」等の活動をサポートしていった。震災直後に、学生自身が宮城県石巻市を訪れ、被災地の現状を記録。学内外で写真展を開催することで、遠隔地ゆえに震災の情報が錯綜していた大分県の人々に、被災地のリアルな姿を伝えた。そ

の後も「遠隔地である大分から今東北に何が出来るのか？」をテーマに、有志学生20名が、キャンパス内外での募金活動や被災地域にある大学との復興支援交流に取り組んだ。スカイプによる石巻市長との対談などを通じ、被災地の状況についてさらに理解を深めた彼らは、大分県の特産であるカボスや別府の天然温泉入浴剤「湯の花」を被災地に届けるなど、九州、そして大分だからこそできる被災地支援を展開してきた。

その頃、文部科学省主催の「生涯学習ネットワークオーラム2011」に出席したセンターの高見大介副センター長は、ガクボの西尾雄志センター長と出会う。ガクボは、震災以降、継続的な被災地支援を行つてきたが、ボランティアのニーズが「瓦礫の撤去や施設の修復などから、次第に被災者の心のケア、生きがい等につながる幅広い支援活動」へと移行していることへの対応を検討していた。



湯の花プロジェクト



東日本大震災NBU写真展

（☆3）絆プロジェクト／3：11震災直後からNBUの有志の学生が始めた「遠隔地からの被災地支援」をテーマにした東日本大震災復興のための継続的な支援活動。東日本大震災写真展、カボス湯の花プロジェクト等、被災地と大分県民を結びつけて支援する活動を学生のアーティアとネットワークで展開。

（☆2）人間力育成センター／教育理念のひとつである「人間力の育成」を学部・学科の垣根を越えて教職員体で進める組織として2007年8月に発足。学生に社会貢献の場を与える自発的な社会参加を促すことで、アイデンティティーと正義感・職業観等を芽生えさせる。主な取り組みは、ボランティア活動、企業・地域との協働プロジェクト、環境活動など。

（☆1）日本財団学生ボランティアセンター／愛称Gakubo。学生ボランティアの支援を目的に、2010年4月設立。東日本大震災では、6000名以上の学生ボランティアを東北に派遣。学生インターン制度による学生ボランティアの支援を目指している。

一方、NBUは、支援活動の意志や想いはあるものの、日々変化する被災地の状況やニーズを的確に把握する方法を見つけられずいた。

互いに意見、情報交換を進めるうちに、ガクボは、「志を持つて、長期的、継続的に復興に関わろうとする人材を育てることができ教育機関との連携を求めていること」、NBUは、「被災地のニーズを発掘できるコネクションと活動ノウハウを求めていること」が分かる。ガクボがNBUの「糸プロジェクト」の取り組みに強い興味を示してくれたことをきっかけに、互いに協働し、より教育的效果を高めた被災地への支援活動を約束。被災地である福島県南相馬市の小学生に対する支援を行うことを共通の目標として設定した。さまざまな準備期間を経て、2012年4月よりガクボとNBUの提携講義「<sup>(☆4)</sup>被災地児童支援実践」を開講することとなつた。



NBUと日本財団学生ボランティアセンターとの提携調印式。（[左]平居学長 [右]西尾センター長）

（☆4）被災地児童支援実践／被災地である福島県南相馬市の小学生を大分県内に招いて行う子どもキャンプの企画立案運営を通じて被災者が求めるボランティアの手法や実践を学ぶことを目的とした日本財団学生ボランティアセンターとの提携講座。

# 第一章 始まりの春



大学生だからこそできる、  
ボランティアのスタイルがきっとある。

「阪神淡路大震災が起きた1995年が、日本ではボランティア元年といわれています。それから10年経って、ボランティア活動を通じた人材育成を行う大学がようやく増えてきました。東日本大震災でも多くの大学がボランティア活動に積極的に取り組みましたが、そのほとんどのプログラムは被災地に行ってボランティア活動を行うものです。今回、日本文理大学と取り組んだプログラムは、被災地に出向くのではなく、被災地域の子どもたちを大分に招待するというもの。大分という地域の素晴らしさを通して、ボランティアを行う人材を育成すると同時に、被災された児童の可能性も伸ばしていくという内容でした。これは、他大学は取り組んでいない先駆的な活動だといえます。「あゆみプロジェクト」で実施した子どもキャンプは、小学校高学年の子どもたちと、近い世代の大学生が一緒になって、学び、遊べる、若者ならではのボランティアスタイル。子どもたちにとって、ボールを遠くに飛ばせたり、速く走れたり、料理が上手なお兄さん、お姉さんの存在を身近に感じられることは大きな経験になるのです。ボランティアは、年齢は問いません。さまざまな活動の中には学生の力が活きるものもたくさんあります。

今回の「あゆみプロジェクト」を通じ、被災地支援のあり方、地方と都市の格差など、学生たち自身にさまざまな疑問や課題が生まれたと思います。それらを、大学ならではの専門分野における研究、座学のなかで学びにつなげていってほしいですね。実践と学びの融合。これこそが、東北の復興、日本の未来につながる人材の育成だと考えています。

【プロフィール】西尾 雄志(にしお・たけし)  
日本財団学生ボランティアセンター代表。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員准教授。著書に「世界をちょっとでもよくしたい—早大学生のボランティア物語」(共著・早稲田大学出版部)ほか。



NBUでは、「被災地児童支援実践」講座をセンター主導で進めることを決定。センターは、到達目標や年間授業スケジュールなどを作成するが、具体的な支援内容、プロジェクト案に關しては、あくまで主役となるのは大学側ではなく、学生であることを重視。さらに受講対象は、これまで行政・民間を問わずに実践してきた年生。4月13日、学内にて第1回目のオリエンテーションが開かれた(☆5)。

自身のキャンパスライフがスタートしたばかりだという事情もあり、参加した学生は、男子2名、女子3名のわずか5名。高見氏は、3・11東日本大震災直後から発足した「絆プロジェクト」の流れを説明し、「被災地から遠く離れた大分県から出来ること、大分県に

しか出来ないこと」をテーマに、自分たちの可能性を信じながら取り組んでほしいと、一人ひとりに伝えた。履修学生5名の最初の課題は、仲間を探し、集めること。誰でも良いわけではない。今後、被災地復興の取り組みにおいて苦難を共にできること、非日常的な状態にある被災地に対して、何かしたいと想う気持ちを継続できること、そんな強い志を持つ仲間をセンターに連れてきてほしいと訴えた。

4月18日、オリエンテーション2回目。前回参加した5名の学生が、新しい仲間を連れてきたことでメンバーは最終的に17名になつた。ここで、ひとつの問題が浮き彫りとなる。3・11当時、メンバーは全員、高校生。東北地方の出身者はおらず、もちろん震災ボランティア活動の経験もない。彼らは、テレビのニュースやインターネットによる情報収集が中心で、その中には不確かな憶測やネガティブな



グループに分かれて自己紹介からスタート



17名のメンバーが初めて集結



最初に集った17名にプロジェクトの趣旨を説明

(☆5)人間力育成センターでは従来、2・3年次にボランティアや地域社会貢献に取り組む社会参画授業をしている。しかし、今回は教員と学生が相互にミュニケーションを図る双方型学習「アクティブ・ラーニング」という教育手法により、学生の学びに対する意欲」を引き出すことを重要視。1年次から大きなプロジェクトに参加することで、学生自身の能動的学習の意識が高まることを期待した。

世論も含まれていた。そこで、改めて自分たちで被災地の正確な情報収集を行い、課題を整理することからプロジェクトをスタートさせることにした。数多くの課題を解決するために、自分自身が「大分」で出来ることを考えた。大学生として、高校生の時とは違う環境に置かれた1年生たち。大学生活に慣れるだけでも大変な時期に、経験したことのないプロジェクトに挑む。仲間のもとに飛び込むこと、自分を知つてもらうことに対する上手く心を開けない学生たちであったが、被災地のために何かをしたいという気持ちだけつながりながら、手探りの日々が始まった。

4月21日から、定期的に外部講師を招いての授業がスタート。まずは、福島県の〔☆6〕NPO「メックス」の鈴木壽氏・坂本朋枝氏から被災地の現状が語られた。〔☆7〕外で遊ぶことを時間制限されている子どもたちがいること、仮設住宅での狭い空間での閉塞感があることや、老若男

女問わず抱えるストレス等…それらは、学生たちが得ているインターネットからの情報よりもはるかに深く、重いものだった。

ガクボの西尾氏からはボランティアの考え方を学んだ。ボランティアとは、非日常的生活から、生活を日常に戻すための緊急支援であり、その可能性を様々な立場にある人々に伝え、考えさせるきっかけを作ることこそが、本当に意味のあるボランティア活動につながるという話を聞く。そのために、何が必要なのか、具体的にどのような気持ちで取り組めば良いのか。被災地支援の難しさに気づき始める。

青少年キャンプにおいて豊富な経験を持つ〔☆8〕国立青少年教育振興機構の北見靖直氏からは、「プロジェクト成功の鍵は、まず相手の立場になってモノを考えること、そのためには、自分の心を開くことが大切」と、学生たちに熱いメッセージが届いた。



西尾氏から「ボランティア」について学ぶ

〔☆8〕国立青少年教育振興機構／体験活動を通して青少年の自立を目指す青少年の自立」を目標として、平成18年4月に発足。幼少期から青年期までの各年齢期に必要な様々な体験活動の機会を青少年たちに提供することで、「体験の風をおこそう」運動や、「早起き朝」は「国民運動を、全国28の教育拠点（国立オリンピック記念青少年総合センター）、青少年交流の家、青少年自然の家にて推進し、立地条件を活かした特色のある活動を開催している。

〔☆7〕地域によっては、中学生への屋外活動の時間制限や長袖・長ズボンの着用を進めていた時期があった。現在では小中学校の除染作業が完了し、モニタリングの結果からも放射線量の低減化がはかられていることが確認されていることなどの理由により、屋外活動（体育・野外観察部活動等）については、特に制限は設けられていない。【相馬市HPより引用】

〔☆6〕NPO「メックス」／福島県南相馬市を中心に被災者支援・地域支援を行う特定非営利活動法人。現在は主に避難所・仮設住宅へ避難されている人々のメンタルケア・身体ケア・ボーツの楽しみを広げる活動を行っている。

さらに、(☆9)セブン・イレブン記念財団・九重ふるさと自然学校（以下、九重ふるさと自然学校）の寺村淳氏から、大分の自然を活用した体験教育活動の事例を聞き、大分県の風土が持つ高いポテンシャル、自然と向き合うことの奥深さと予想される危険などに熱心に耳を傾ける学生たち。講義が進むにつれ、南相馬市の現状やボランティアに求められていることが分かりはじめ、これから自分たちが取り組むプロジェクトのアウトラインが見えてきた。学生たちが持ち寄った課題や、被災地支援のアイデアは100を超えた。そのすべてのアイデアの長所と短所を洗いだし、実現可能な支援活動を検討。ミーティングは、授業時間内では終わらず深夜にまで及んだ。議論を重ねた結果、「遊ぶ・学ぶ・活かす」というキーワードに意見が集約され、「自分たちがやるべきこと・自分たちにしか出来ないこと」が次第に明確になってくる。



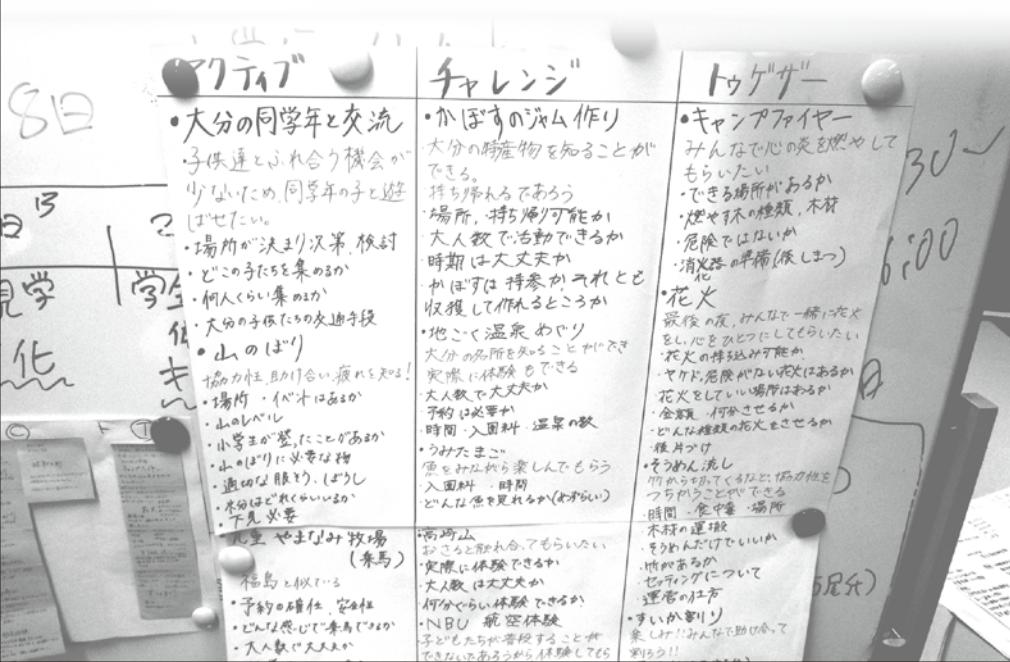
100を超えるさまざまなアイデアを出し合い、プロジェクトのキーワードは「遊ぶ・学ぶ・活かす」に決定



寺村氏から自然体験活動の可能性や難しさを学ぶ

(☆9)セブン・イレブン記念財団・九重ふるさと自然学校／大分県九重町で一般財団法人セブン・イレブン記念財団が運営する自然学校。自然共生型田んぼづくり、地域の生きもの、しきべなどの自然体験活動や野焼きへの参加などを通して自然環境保護・保全を促進している。

## 第二章 決意



子どもたちと信頼関係を築くには、  
自分自身を変えていくことが大切。

7泊8日の子どもキャンプを、大学生がプロデュース、実行するのは簡単なことではありません。その緊張感とプレッシャーからなのか、最初、彼らのもとを訪れた時、何かを怖がっているようでした。そこで、まずは相手の立場になってモノを考えること、自分の心を開いて相手に気持ちを伝えることの大切さを伝えました。子どもキャンプが、お互いにとって、思い出深いものになるためには、福島の子どもたちと学生との間に、信頼関係が生まれることが何より大切です。そのために、学生が取り組むべき課題はたくさんありました。子どもたちの安全を守ることはもちろん、一人ひとりにどんな声をかけてあげるか、どのように接するのがベストなのを常に考えなくてはいけません。すべてに全力を尽くしてこそ、学生自身が成長し、そして子どもたちを成長させることができます。

7泊8日のロングスケジュールは確かに大変ですが、一度、失敗したことを取り戻すチャンスがあることは良かったのではないでしょうか。うまく段取りができなかったり、コミュニケーションが不足していたと感じたら、全体ミーティングで反省し、翌日に修正していく。それも学生にとって貴重な経験となったはずです。

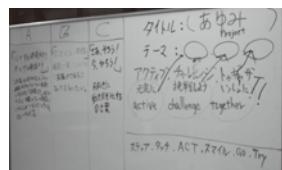
夏休みに大自然の中で子どもらしい体験ができたことは、福島の子どもたちにとって忘れられない思い出となったでしょう。数年に一度でもいいから、今夏を共に過ごした子どもと学生の交流が続いていくといいでですね。お互いに、「強さ」と「しなやかさ」を持ちながら、未来へと歩み続けてほしいと願っています。

### 【プロフィール】北見 靖直(きたみ・やすなお)

国立青少年教育振興機構 教育事業部 事業課長兼指導主幹。東京都青年の家4ヶ所に勤務。都青年の家廃止後も青年の家の職務継続を志し、都を退職。国立青年の家本部(現 国立青少年教育振興機構)の公募採用試験を経て国立中央青少年交流の家に企画指導専門職として7年勤務後、現職。平成23年夏には福島県内小中学生3,860人が参加した「リフレッシュ・キャンプ」を担当。

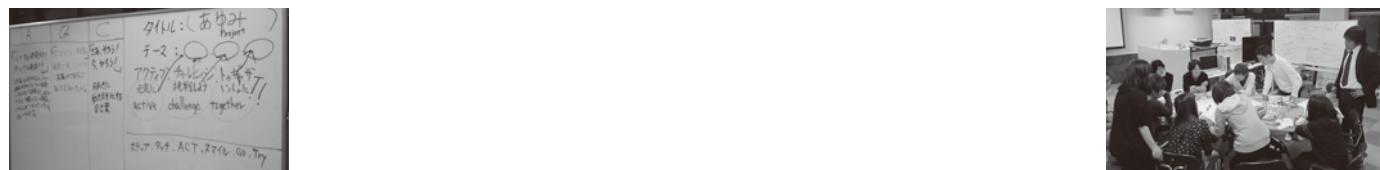


5月、「ゴールデンウィーク直後のミーティングで、ついに自分たちが取り組むべきプロジェクトが決まった。それは、今夏、被災地である南相馬市の小学生を大分県に招いての7泊8日の子どもキャンプの開催。被災地には、未だに外で思いつきり遊ぶという「当たり前」のことができない子どももいる。そんな南相馬市の子どもたちを豊かな自然が広がる大分県に招いて共に時間を過ごす。それも短期間ではなく、7泊8日という長い時間を設けることで、子どもたちに楽しいだけではない、かけがえのない経験を届けたい。それが復興に向けた明日につながってほしい…そんな想いが、次々と学生から語られていく。みんなの意見を整理することで子どもキャンプのコンセプトが誕生した。それは、思いつきり遊べる＝Active（アクティブ）、文化を学ぶ＝Challenge（チャレンジ）、共に自分を活かす＝Together（トゥギャザー）。



ミーティングを重ね、キャンプのコンセプトやプロジェクト名が決定

自分たちがやるべきことは、南相馬市の小学生が笑顔になれる子どもキャンプの実施。そして南相馬市だけではない被災地のすべての人たちと、共に歩いていきたい、いつまでも寄り添い、共に考えたいという想いから、プロジェクトは、「あゆみプロジェクト」と名付けられた。



5月に入り、ミーティングも活発になってくる

づく。「キャンプ」を主催するなら、大学生だからといって許されることは「何もない」。寺村氏の厳しい言葉が、学生たちの胸に刺さる。

繰り返される学生ミーティング。ワークキヤンプを構成するActive・Challenge・Togetherのテーマにチームを編成。各テーマごとに具体的なスケジュール案を作成するために、今までのアイデアを再検証し、振り分けていく。この頃から、ミーティングにおいて、実際に福島県南相馬市への現地視察が必要ではないのかという意見が多くなる。ニュースやインターネットだけでなく、現地のNPOの方から話を聞いたことで、ますます強くなつた被災地への想い。現地の小学生は、どのような気持ちで、どういう毎日を過ごしているのだろう…。しかし、17名全員が南相馬市へ向かうことは、

物理的に不可能である、話し合いの結果、学生を代表して2名がボランティア活動と被災地の視察を兼ねて南相馬市に行くことが決定。各メンバーが、「あゆみプロジェクト」における自分自身の目標と、小学生に学んでほしいこと、社会に与えたい影響などをテーマにレポートを作成。レポート内容やプロジェクトチーム内での役割などを考慮した結果、経営経済学科の山本久留実と、航空宇宙工学科の福島伸明が現地に向かうことが決定した。

少しでも早く現地の実情を把握し、プロジェクトへと反映できればと考え、6月2日より3日間にわたる南相馬市訪問が計画された。また、残りメンバーは、その間、Challengeプログラム計画の中での訪問を予定している、大分県別府市明礬温泉地区の「<sup>(注10)</sup>おせつたい祭」にボランティアとして参加することを決める。子どもたちが主役のお祭りに参加して、運営方法や子どもたちとの触れ合い、大分



祭りを通じて子どもたちに触れ、地域文化を学ぶ

（今）江澤主席は大分見別しまのおせいだい、大分見別市にある銀鑾温泉協同組合主催の伝統的なお祭り。地域の子どもたちの守り神であるお地蔵さまを巡り、お菓子などをもらいうさぎ集めながら、地域の文化に触れる。地域の子どもたちが多く参加。



メンバーを代表して、山本久留実（左）と福島伸明（右）が南相馬市を訪問

の文化を学ぶことにした。

6月2日、山本と福島は、人間力育成センターの高見氏と福島県南相馬市を訪れる。以前、大学で講義をしていただいた「NPO メックス」の協力により、南相馬市にある仮設住宅でボランティアの手伝いをさせていただくことになっていた。仮設住宅の利用者へのお土産として「絆プロジェクト」の活動を通じ、別府市明礬温泉からいただいた「湯の花」を袋に小分けして、手書きのメッセージを書いた。被災地がどのような状況であるのか、そこで暮らす人々がどんな想いを抱いているのか、自分なりに調べたり、関係者から現地の状況を聞き、覚悟をして南相馬市へ来たつもりだった。

しかし、二人は目の前に広がる景色に言葉を失う。かつてニュースで何度も見たような瓦礫はもう山積みされてはいなかつた。ただ何もない街がそこにある、建物の骨組みだけがかろうじて残っている

が、かつてそこに何があったのだろうか。

話を伺った仮設住宅で暮らす女性は、「津波で全部流されたけど、海が好きで、海を見ながら育つたからね」と呟いた。

初めて被災地の方の生の声を聞き、ボランティア活動に励んだ一日。身体はとても疲れていたのに何故だか眠れなかつた。ホテルに戻り、二人は遅くまで話し合つた。「自分自身に起つた出来事のように被災地のことをずっと想つていた。でも、やっぱり他人事だったのかな」。大分に居ては感じることのできないものがあるから、私達はメンバーを代表して南相馬市を訪れた。でも、ここで見たもの、今、感じていることを、どんな言葉でみんなに伝えればいいのだろう…。

ふと、カレンダーに目をやると本番まで3ヶ月を切つていた。



南相馬市で出会った方々



被災者の方々から震災時の様子や今の生活を聞く



NPOの協力で南相馬市のボランティア活動に加わる



南相馬市に到着して、初めて目にした風景

## 第三章 焦 燥



**大自然の中で体験することは、  
かけがえのない人生の宝物になる。**

大分県には、温泉やレジャー施設、観光スポットなどが数多くあります。しかし、今回の「あゆみプロジェクト」の子どもキャンプでは、たんなる観光地めぐりにならないように、学生の皆さんには、どこを訪ねるのか、そこで何を行うのかといった「理由」をしっかりと考えてほしいとアドバイスしました。

今回、学生たちは、福島の子どもたちと一緒に、草原で遊んだり、滝すべりにチャレンジしましたが、大自然の中で体験したこと、感じたことは、かけがえのない宝物としてお互いの記憶に刻まれるでしょう。もちろん、自然が相手なので、気をつけなくてはいけないところや、準備をしなくてはいけないことが多いのも事実。当初は少し軽く考えているように見えた学生たちですが、キャンプ本番では福島の子どもたちを預かる立場としての自覚が芽生えていたのが印象的でした。

私は震災前の福島県を訪れたことがあるのですが、実は大分県と風土がよく似ています。美しい海、雄大な山々、街を歩けば、美しい風景にたくさん出会います。今回、招待した南相馬市の子どもたちは今、その美しい風景を見ることはできないかも知れません。しかし、いつの日か彼らが大人になったときに、復興を果たしたふるさとの風景を眺めながら“子どもの頃に行った大分に似ているな”と感じるとき、故郷を大切に想うその先に、大分で体験した風景が重なっていくでしょう。

この経験を活かし、大分県の魅力ある場所をもっとたくさん探して、そこで何をすることが楽しいのかを、もっと深く考えてみるといいですね。県内の施設や団体へ積極的に働きかけるのもいいでしょう。それにより、次の子どもキャンプはさらに大分の魅力が詰まった充実したプログラムになると思います。

**【プロフィール】寺村一淳(てらむらじゅん)**

昭和54年、滋賀県生まれ。大学院進学のため移り住んだ新潟で、自然を・街を・人を考えるNPOと出会う。平成18年より「セブン・イレブン記念財団九重ふるさと自然学校」のスタッフとして、九重の自然を守り、次世代へと伝える活動に取り組む。「おおいた水フォーラム」運営委員、大分大学の特別講師・非常勤講師など幅広いフィールドで活躍している。



7泊8日の子どもキャンプのスケジュールを立てるることは容易ではない。立ち寄る場所の選定、そこで何をするのか、どのくらいの時間を要するのか、次の場所への移動時間や食事はどうするのか、子どもたちにとって危険な箇所はないのか。ルートが確定し、スケジュールが組まれる度に、やらなくてはいけないこと、注意すべきことが次々と出てくる。起こりうるトラブルやリスクに対応するための学生スタッフ用マニュアルブックは、気づくと100ページを超えていた。

また、実際にキャンプ場の視察、子どもたちと一緒につくるピザの試作、協力していただく観光地や施設の方との現地での打合せ。どれもが決して欠かすことのできない重要なことばかり。先へと進めなければいけない課題が次々と溢れ出てくるが、思うように対処できずに焦りだけがメンバーの間に広がりはじめる。次第にメンバー

同士の会話が少なくなり、笑顔が消えていく。当初は「やりたかったこと」が、今は「やらなくてはいけないこと」へ。互いを思いやる気持ちが失われてゆく。カレンダーを睨みながら、一人ひとりがストレスを抱え過ごす日々が続くなか、チーム内の雰囲気が少しずつ変わつていった。授業の合間、放課後、時に休日まで、これまで17人のメンバーはセンターに集い、大きな目標に向かつて共に歩んでいた。しかし7月に入り、メンバーの中で、ほとんどセンターを訪れない学生が増えてきた。積み重なる作業、被災地への想い、自分たちの成長…。ポジティブな気持ちとネガティブな心の弱さが彼らの中でせめぎあう。気づけば、約半数のメンバーが教室を訪れなくなっていた。その状況を打破するために、今いるメンバーだけでミーティングが行われた。その話し合いの中でも「やる気がないのなら、今のメンバーだけでやればいい」という者と、「17人で一緒に頑張ろうと決めた



ピザづくりなど試行錯誤を繰り返す



本番が迫り、ミーティングが深夜に及ぶことも増える

じやないか」という者。意見は分かれ、話し合いは深夜にまで及んだ。

ようやく辿りついたひとつの結論。それは、誰一人欠けることがなく、最後まで全員でやり遂げたい。そんな想いを込めて、彼らは「あゆみプロジェクト」のポロシャツを作る。背中には、ほとんど顔を出さなくなつたメンバーも含む17名全員の名前を刻んだ。それは自信を失い、不安が広がる自分たちを鼓舞する誓いでもあり、メンバーの絆を感じたいという願いでもあったのだろう。

ポロシャツが完成した日、大分県には台風が近づいていた。風が強まり、小雨が降りしきる夕暮れに、大学から数十キロも離れた町に住むメンバーのもとへポロシャツを届けに向かった。雨風でびしょ濡れになつた友人から、ポロシャツを渡された時のことを、しばらく教室に顔を出していなかつたメンバーの一人が、少し照れくさそうに語つた。

「申し訳ないなという気持ちでいっぱいだった。それと…やっぱり嬉しかつたです」。

残り1ヶ月を切つた頃、再び17人のメンバーによる「あゆみプロジェクト」が動き出す。今回の子どもキャンプのメインイベントである野外キャンプのシミュレーションのために、九重ふるさと自然学校の子どもキャンプにボランティアとして参加。飯盒での炊き方も、火の危険性も、スケジュール管理も万全のはずだった。しかし、インターネットで確認したはずのやり方が、マニュアルブックに載せたはずの対処方法が実際には上手くいかない。それが焦りにつながり、子どもたちの行動を的確に把握できない。本番まであとわずかだというのに、あまりにも出来ないことが多すぎる。



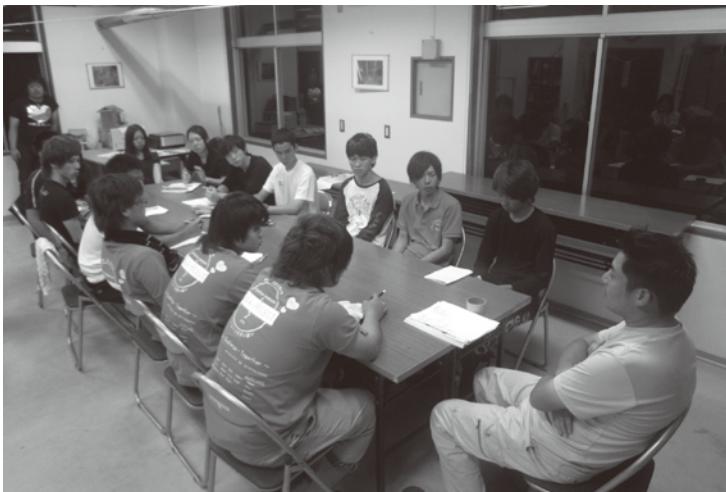
プレキャンプでは、初めて経験することに悪戦苦闘



約1ヵ月ぶりにメンバー全員が集合。  
熱い議論が交わされた



メンバー全員の名前と想いが刻まれたポロシャツ



プレキャンプを終えた後のミーティングで、寺村氏から厳しい指摘を受けるメンバー

プレキャンプ終了後、果然とするメンバーに向かって、九重ふるさと自然学校の寺村氏が語りかけた。「子どもたちより先に自分が食事をするんですか？火が危ないからといって、子どもたちを遠ざけてしまうのですか？しかめつ面でキャンプファイヤーをしている君たちを見て、子どもたちは楽しいと思いますか？」。キャンプにおいて、自分たちは参加者ではなく、預かる立場にいる。その自覚が欠けていたことに彼らは気づく。自分たちのことばかり考えていてはダメだ、子どもたちの気持ちに寄り添うことが大切なんだ。数日後、メンバーの志願により再びプレキャンプを実施。今度はしっかりと結果を残した。いよいよ福島から子どもたちがやってくる。心地よい緊張感と強い使命感が、彼らの胸に宿る。



キャンプ中に気づいた点は、メンバー間で情報共有



本番で予定している「火おこし」にも初挑戦



KEYWORD

## プロジェクトから 学んだこと

自分自身の壁をなくしていくことで  
相手の気持ちや言葉がわかるようになる。

友達から声をかけられて「あゆみプロジェクト」に参加したのですが、大学生活が始まったばかりだったので、最初の頃は、自分も他のメンバーも少しためらいを隠せずにいました。でも、授業やミーティングを通じて仲間とのコミュニケーションの機会が増えるにつれ、お互いの考えていることを理解できるようになりましたり、自分の思っていることを少しづつ伝えることができるようになりました。そのとき、自分自身で壁をなくして、相手と向き合わないと何事も前には進まないということを実感しました。子どもキャンプの期間中も、みんなの輪に入れない子どもがいたのですが、その経験を生かし、そっと背中を押してあげることができました。

プロジェクトを振り返ると、上手くいったことより、失敗したり、落ち込んだ経験の方が多いような気がします。時間をしっかり守ること、相手を気遣うこと、考え方や行動に責任を持つこと。どれも当たり前のようですが、実際に自分でやってみると難しい。自分の良い所、そうでないところを改めて見直すことができたので、今後の学生生活に生かしていきたいですね。

今でも福島で暮らす子どもたちのことをふと考えことがあります。再会を果たしたときに見た南相馬市の景色も忘れる事はないと思います。子どもキャンプが終った後に感じていた達成感とは別の「これがゴールではなく、ここから始まるんだ」という想いが自分の中に芽生えました。僕たちはまだ1年生。残りの大学生活で、被災地のために何ができるのか、ボランティア活動で大切なことは何かをじっくりと考えて、カタチにしていきます。

【プロフィール】須賀流星(すが・りゅうせい)

日本文理大学 経営経済学部 経営経済学科1年。「あゆみプロジェクト」17名メンバーのうちのひとり。  
NBU系列校である日本文理大学附属高等学校出身。



## 第四章 一瞬の夏



8月16日、午前11時10分。ついにその時はやってきた。福岡空港で到着を待つメンバーたちのもとに、現れたのは被災地、福島県南相馬市で暮らす小学5・6年生の子どもたち19名。一行はバスに乗って、NBUの湯布院研修所へ。いよいよ7泊8日の子どもキャンプ「あゆみプロジェクト」が始まった。

翌日、メンバーにとって、これまでの努力と準備の成果が問われる時が訪れる。それが、最初のActiveプログラムとして用意した「エンジョイリバー」。地元の海や川、プールに入ることが少なくなってしまった小学生に、日焼けするくらい、思いっきり遊んでもらおうと考えたプログラムだ。場所は大分県玖珠郡九重町にある竜門の滝。「日本」の滝滑り」と呼ばれるダイナミックな滝は、まさに大分県の大自然を最大限に活用したActiveプログラムにぴったりのスポット。しかし、危険を伴う可能性もあった。

現地に到着し、最終のミーティングが行われる。「自分たちは大切な子どもたちを預かっているんだ」。プレキャンプの際に芽生えた責任感を全員が共有している。応急救護の方法、AED講習など「エンジョイリバー」を成功させるために学んだことを、もう一度確認する。さあ、いいよスタートだ。



お互いを知るためにレクレーションで、  
ようやく笑顔が見え始める



メンバーと子どもたちが、ゲーム形式で自己紹介



顔合わせを兼ねたランチタイムでは、  
緊張で会話を弾まない



メンバーと子どもたちは緊張と期待を抱えながら  
研修所に到着

えることもなく「ヨンジョイリバー」は大成功した。最後に龍門の滝をバックに記念撮影。久しぶりに水遊びを楽しんだ子どもたちの弾ける笑顔、大切な子どもを預る立場を自覚し、無事にプログラムのひとつを終えることができた学生たちの安堵の表情が示すように子どもたちとメンバーの距離はグッと近づいた。

次のActiveプログラムは、九重の草原を舞台とする。野山を駆け巡ることや、草花に触ることも心配される環境に置かれた子どもたちがいることに対しても、直に動植物に触れ、自然のエネルギーを全身で感じ取つてほしいという想いから計画された。かけっこ、野草摘み、昆虫採集など思い思いに遊ぶ子どもたちに、事前に自然学習をしていたメンバーが大分県の自然について語りかけた。たくさんの会話が生まれ、同じ時間を一緒に過ごす喜びが溢れた。午後のピザづくりでは、火をおこし、食材の下ごしらえを子どもたちと共同で行い、大学生と子ども、メンバー全員の確かな成長があった。

もたちが一体となつたチームワークを実感できた。火や刃物を小学生に使わせることの危険性は、十分に学習していたが、子どもたちは思ひもよらない行動を取ることもある。「遊ぶときは遊ぶ、叱るときは叱る」のメリハリが重要と考え、それをすぐにアクションとして起こせるようになってきた。そこには育まれつゝある子どもたちとの信頼関係と、メンバー全員の確かな成長があつた。

子どももキャンプは中盤を迎えて、Challengeをテーマとした、文化を学ぶプログラムへ。「見る・感じる・学ぶ」に主題を置き、選ばれた場所は「うみたまご」、「高崎山」、「明礬温泉」、「大分県物産館」。

「うみたまご」は、福島県を代表する水族館「アクアマリン福島」と共に次世代水族館として挙げられることが多い。現在、「アクアマリン福島」は津波被害に遭い、規模縮小の営業を余儀なくされている。大分



「うみたまご」名物のセイウチショーに全員が大興奮



子どもたちと一緒にピザづくり



「大分」のダイナミックな自然を全身で感じる



スリル満点の滝滑りに子どもたちは大はしゃぎ

県にある「うみたまご」を見学することで生き物の尊さや復興に携わりたいという想いが育まれることを信じて選んだ。

また、福島県はニホンザルの生息地であり、県も保護計画をもつている。小学生が、大分にある野生猿公園「高崎山」で猿とふれ合い、遊ぶことで故郷に対してたくさんの想いを感じてくれるなどを考えた。「明礬温泉」や「大分県物産館」では、地元の皆さんから、さまざまな支援をいただき、小学生と共に、地域文化の大切さを学んだ。

翌日は、「メモリーズ・エアポート」を実施。豊後大野市にあるNBUの空港キャンパスで、航空宇宙工学科の協力を得て、セスナ機の搭乗体験や、競技用紙飛行機づくりを行う。普段体験することのない貴重な経験に小学生だけでなく、メンバーも目を輝かせた。

大きなトラブルもなく、順調にスケジュールをこなし、いよいよ子どもキャンプのクライマックス、Togetherプログラムが待っている。この日

のために、メンバーは現地視察やプレキャンプ、歌やダンスの準備に取り組んできた。自分たちの成果が試される日、今こそ一致団結すべき時に事件は起きた。

宿舎である湯布院研修所に戻り、明日のキャンプに向けて、最終のミーティングが進むなか、これまで常に緊張状態を保っていたことへのストレスからか、ふとしたことから口論が始まつた。「お前が子どもと遊んでばかりのとき、俺は荷物をずっと見てたんだぞ」という者と、「子どもたちとコミュニケーションせずに、何で自分のことばかりしてるんだよ」という者。メンバー同士で、今まで我慢していた相手への不満が溢れ出す。互いに支え合い、すべてを南相馬市の子どもたちと過ごす時間に捧げると誓つた17人の仲間の絆が崩れ始める。メンバーの意見は分かれ、互いに傷つけ合う。本来なら、明日の天気のことだけを心配していればよかつたはずの前夜、「あゆみプロジェクト」に、これまでに



毎日、子どもたちと一緒に一日を振り返る



手づくりの紙飛行機を大空に向かって飛ばす



NBU空港キャンパスでは、男の子たちが大はしゃぎ



高崎山の猿たちと記念撮影

ない危機が訪れていた。

長い沈黙が続く。時計は午前3時をとつくるに回っていた。事の次第を黙つて聞いていた高見氏。このプロジェクトの主役は学生であるという想いから、これまで、いかなる局面においてもできるだけ口を挟まずになるべく学生たち自身が意見を出し合い、自ら解決していくことを重要視していた。そんな彼が彼らに問う。「君たちは何にこだわっているのか？被災地、南相馬市の子どもたちに今よりもっと元気になつてもらい、やりがいや達成感を感じてもらう。そのために半年近くも、みんなで頑張ってきたんだろ」。その言葉に我に返る学生たち。自分たちは大切な何かを忘れていた気がする。大切なことをちゃんと見つめていなかつたのかも知れない…。

翌朝、揃いのポロシャツに袖を通した17人がいた。もう一度、チーム全員が一致団結する。その答えは自分たちのためにではない、すべては彼

らの目の前にいる子どもたちのためにある。

その日、メンバーと子どもたちは、飯盒でご飯を炊き、カレーを作り、みんなで二つの輪になつて食べた。準備も後片付けも、全部、子どもたちとともにやる。夕暮れのキャンプファイヤーも、照りつける太陽の中、汗だくになりながら一緒に作り上げた。美しく燃え上がる炎を囲みながら、みんなで歌い、手をつなぎあつてダンスを踊る。南相馬市の仮設住宅での非日常的な毎日を送つている子どもたちへ、毎日の暮らしの中で漂う閉塞感に心折れることなく、力強く前向きに生きてほしい。そんな願いを込めたキャンプファイヤー。随分長いと思つていた7泊8日の子どもキャンプだが、気づけば明日が最終日。子どもたちに自分たちの想いは伝わつているだろうか、もつと一緒にできることはないだろうか、そんなことを考えていると、メンバーの胸に熱い想いがこみ上げる。最高に楽しい時間なのに、なぜか涙が溢れる。それはメン



満天の星空の下でのキャンプファイヤーは最高の思い出



お互いに協力しあいながら夕食の準備



それぞれが真剣にぶつかり合った深夜ミーティング



成功させたいという想いからミーティングは毎晩のように開かれた

バーだけではない。子どもたちの目も同じように潤んでいた。

最終日、「あゆみプロジェクト」のフィナーレ「想い出アートプログラム」。子どもたちに「やれば出来る! 未来は自分達でつくることができる!」というメッセージを伝えるために、全てのプログラムで撮影した笑顔の写真約1000枚でモザイクアートをつくった。楽しかったこと、大変だったこと、子どもたちもメンバーも7泊8日で体験した出来事を思い出しながら完成させた。

そして、残されたわずかな時間の中で、互いに絆を確かめあい、再会を誓いあつた。

8月23日、夢中になって取り組んだ「あゆみプロジェクト」の夏が終わつた。



「あゆみプロジェクト」7泊8日の思い出がつまつたモザイクアート



福島へ飛び立つ飛行機をいつまでも見送るメンバー



空港の搭乗口で子どもたちをハイタッチで見送る



お別れパーティで、子どもたちからメンバーへ  
手書きのメッセージカードが贈られた



モザイクアートに全員でチャレンジ

大学生と子どもの絆が  
明日への架け橋になる。







KEYWORD

## 「あゆみプロジェクト」と 人間力教育

# 最終章 再会、明日へ



学生自身で考え、答えを見つけること、  
それが「人間力」へつながっていく。

NBUでは教育理念のひとつに「人間力の育成」を掲げ、人間力育成センターでは、さまざまなプロジェクトを通じて「人間力」を養おうとしています。今回の「あゆみプロジェクト」において、経験を積んだ2・3年生ではなく、あえて入学したばかりの1年生を対象にしたのは、できないことを受け止め、そこからチャレンジを始めてほしいという願いがあったからです。ミーティングや子どもキャンプの実施中に、学生同士の意見や価値観の相違から摩擦が生まれることも少なくありませんでしたが、その際もすぐに口を出したり、解決方法を提示しませんでした。なぜなら、大学教育においては、学生自身が自分たちの力で答えを見つけ出し、実践していくことが何より大切だと考えたからです。

入学直後、まだ大学生活にも慣れていない中で、復興支援という大きなテーマのプロジェクトに参加することは、学生たちにとって、とても勇気のいることだったと思います。南相馬市の子どもたちに笑顔になってもらうために、失敗や成功を繰り返しながら努力した日々は、人生で初めて「自分自身で考えて行動する」とことと向き合う時間だったでしょう。「あゆみプロジェクト」は、ニュースを見たり、インターネットからの情報を取り入れる間接体験ではなく、自分自身の心と体で経験した直接体験です。学生たちには、この経験をスタートラインと考え、今後の学生生活やボランティア活動に生かしてほしいと思います。東北の被災地が本当の意味で復興するまでには、まだまだ時間がかかります。だからこそ、「あゆみプロジェクト」のようにエネルギーと情熱を持ち合せた若者が中心となってできる支援が継続できるフィールドを準備し、社会に対する使命感を養い、実社会に送り出すことが、これからの大切だと考えています。

### 【プロフィール】高見 大介(たかみ・だいすけ)

日本文理大学 工学部 土木工学科(現・建築学科)卒業。現在、人間力育成センター副センター長として、地域・企業と連携したプロジェクトやボランティア活動をサポートする中心的役割を担う。これらの活動は全国的にも注目を集め、文部科学省が後援する「学生ボランティアフォーラム」での事例報告や、早稲田大学、千葉大学などのボランティア関連科目においても取り組みを紹介した。



2012年秋、NBUの学園祭「木祭」。「あゆみプロジェクト」のメンバーは、模擬店を出店。大きな声を出しながらお客様の呼び込みをしている。彼らの目的は、あの夏と一緒に過ごした、南相馬市の子どもたちと再会すること。そのための資金を自分たちで捻出しようとしていたのだ。

「木祭」の最終日、すっかり日も暮れて、冷たい秋風が吹くステージにメンバーたちは立っていた。今回の「木祭」のフィナーレで、会場にいる観客一人ひとりに語りかけるように、自分たちの想いを伝えた。

2011年3月11日、東日本大震災が起こりました。

その時、私たちはまだ高校生で、

被災地のために何かできることを考えても  
ごくわずかな募金をすることが精一杯でした。

そして、翌年の春、日本文理大学に入学し、

大学生だからこそできる復興支援と出会いました。

それが「あゆみプロジェクト」です。

夏休みに被災地、南相馬市の小学生を大分県に招き、

7泊8日のワークキャンプを行う。

4月に始動したプロジェクトは、時に迷い、立ち止まりながら、現実のものとなりました。

小学生に自分たちが何をしてあげられるのか、

どうすれば人として成長できるのかということを、  
現実のものとなりました。

皆で毎日深夜まで話し合いました。

真剣に子どもたちと向き合い、本音でぶつかり合つたことで、

私たち自身も、少しだけ成長できたのではないかと感じています。

東北の復興には、まだまだ時間がかかります。



教職員が行ったバザーの収益金も寄付された



—木祭フィナーレでプロジェクトの想いを伝える



看板や食材調達など、準備も全員で分担



模擬店には、たくさんの支援が寄せられた

あゆみプロジェクトが、今回限りのものにならずに、

来年、そして再来年と継続し、

東北が、そして日本が完全に立ち直ったと言われるまで、

私たちは「私たちだからこそできる」復興支援を続けます。

会場にいた学生、教職員、そして観客の皆さんから温かい拍手が送られた。それは、彼らへの、そして東北へのエールだったのかも知れない。

11月11日、福島県。「あゆみプロジェクト」を代表するメンバー7名

は、文部科学省主催の<sup>(☆11)</sup>「全国生涯学習ネットワークフォーラム20

12」に参加。「学生・若手社会人の全国的なネットワーク構築を目指して」と題した小会議において、メンバーを代表して建築学科の宇都真太郎が活動報告を行い、大学生が取り組んだ復興支援活動は

(☆11)全国生涯学習ネットワークフォーラム2012  
／行政や大学等の教育機関、NPOや民間団体、企業等の関係者が地域の抱えている諸課題について研究協議し、生涯学習を通じた課題解決を目指すとともに、その成果の発信と活動の全国展開を図るネットワークフォーラム。2012年度は岩手、宮城、福島県などで開催。NBUU生は福島分科会「若者達が活躍する「持続可能なまち・地域・社会」に参加した。



フォーラムで活動報告を行った7名のメンバー

他に例を見ない先駆的な活動として、フォーラム参加者からも高い評価を得る。2日間にわたり、学生、若手社会人を中心には、震災ボランティア活動等を通じ、見えてきた地域独特の課題、地域再生のために必要となる“まちづくり”、“ひとづくり”が話し合われ、改めて自分たちが行ってきた活動の意義、やりがいを感じたメンバー。その表情には充実感が漂っていた。

2日目の夕方にフォーラムが終わり、福島市内の会場から2時間をかけてメンバーが向かったのは、南相馬市にある「南相馬市鹿島生涯学習センター」。そう、あの夏と一緒に過ごした子供たちが待っていた。「はじめて」ではなく「久しぶり」、「出会い」ではなく「再会」の瞬間が今、福島の地で訪れようとしている。共に過ごした時間が再び動き始める。高鳴る鼓動とこみ上げてくる熱いものを押さえながら扉を開くと、そこには、わずか数ヶ月しか経っていないのに、ずいぶ



パネルを使ってプロジェクトの内容を説明



「あゆみプロジェクト」の成果をプレゼンテーション

ん成長したと感じる子どもたちがいた。そして、彼らのお父さん、お母さんが笑顔で迎えてくれた。ほんのわずかな時間だつたけれど、楽しかった夏の思い出を語り合い、離れていた間の出来事を報告しあう、子どもたちとメンバー。真夏に咲いた「あゆみプロジェクト」の花は、秋になり大きな実りの時を迎えていた。

最後にみんなで記念撮影を行い、名残り惜しさをこらえながらメンバーは、会場を提供してくれた施設の方へお礼に伺つた。公民館でお世話をしているおじいさんは笑顔で学生たちにこう語りかけた。

「こんな遠くまでよく来てくれたね、ありがとう。本当なら美味しいものでも食べてゆつくりなさいと言いたいところだけど。でも今は、すぐに九州へ帰つたほうがいい」。

その言葉に学生たちの笑顔が消える。今もなお続く厳しい現実と向き合いながら、ここで暮らす人たちがいる。そのことは理解してい

たはずだつたのに…。

「あゆみプロジェクト」のメンバー全員が心をひとつにして、取り組んできたこと。それが、被災地、そして被災地で暮らす人々に何を残せたのか。その答えは、今はまだわからない。それはきっと、「あゆみプロジェクト」が、まだゴールを迎えていない。いや、これからもずっと続く被災地支援のスタートラインに、ようやく立てたという証なのだろう。

東北の復興のために、

子どもたちの未来のために、

そして、自分自身の明日のために。

彼らはこれからも、歩み続けてゆく。



福島での再会を記念して、笑顔の集合写真



南相馬市に来ることができなかったメンバーからの手紙を子どもたちに渡す



大分で過ごした「夏」を記録した映像を全員で観賞



久しぶりの再会に時を忘れて語り合う

「あゆみプロジェクト」の歩み

2013年												2012年			
2月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	4月	3月	13日	22日	3日	東日本大震災における被災地支援活動の提携調印式	日本財団学生ボランティアセンターと	別府市明礬温泉「おせつたい祭」にメンバーが参加
27日 28日	14日	21日	16日	12日	6日	19日・ 20日	27日	16 → 23日	10 ・ 11日	8日	28 ・ 29日	26日	22日	「セブン-イレブン記念財団・九重ふるさと自然学校」視察	「被災地児童支援実践」講座スタート
文部科学省後援「学生ボランティア実践論 応用編」で取り組みを紹介	千葉大学「学生ボランティア実践論 応用編」で取り組みを紹介	経済産業省主催「社会人基礎力育成グランプリ2013九州予選」で奨励賞受賞	早稲田大学「ワークキャンプ論－実践的リーダー養成講座－」で取り組みを紹介	「南相馬市鹿島生涯学習センター」にて、南相馬市の子どもたちと再会	日本財団学生ボランティアセンター「寄附講座・連携講座 事例報告・情報交換会」参加	ドキュメンタリー番組 「未来の力になりたい」東日本大震災復興支援、あゆみプロジェクト、「」 テレビ大分(TOS)で放送	NBU学園祭「木祭」において、南相馬市訪問のための活動を実施	福島県南相馬市より小学生が来県。7泊8日の子どもキャンプ「あゆみプロジェクト」実施	「九重ふるさと自然学校」にて第一回目のプレキャンプ実施	早稲田大学「人権と市民活動・ボランティア」で取り組みを紹介	滝すべり予定地「竜門の滝」視察	NB U空港キャンバスを視察	代表学生2名が福島県南相馬市を視察	日本財団学生ボランティアセンターと	東日本大震災における被災地支援活動の提携調印式
文部科学省主催「全国生涯学習ネットワークフォーラム2012」参加	文部科学省主催「ワークキャンプ論－実践的リーダー養成講座－」で取り組みを紹介	経済産業省主催「社会人基礎力育成グランプリ2013九州予選」で奨励賞受賞	早稲田大学「ワークキャンプ論－実践的リーダー養成講座－」で取り組みを紹介	「南相馬市鹿島生涯学習センター」にて、南相馬市の子どもたちと再会	日本財団学生ボランティアセンター「寄附講座・連携講座 事例報告・情報交換会」参加	ドキュメンタリー番組 「未来の力になりたい」東日本大震災復興支援、あゆみプロジェクト、「」 テレビ大分(TOS)で放送	NB U学園祭「木祭」において、南相馬市訪問のための活動を実施	福島県南相馬市より小学生が来県。7泊8日の子どもキャンプ「あゆみプロジェクト」実施	「九重ふるさと自然学校」にて第一回目のプレキャンプ実施	早稲田大学「人権と市民活動・ボランティア」で取り組みを紹介	滝すべり予定地「竜門の滝」視察	NB U空港キャンバスを視察	代表学生2名が福島県南相馬市を視察	日本財団学生ボランティアセンターと	東日本大震災における被災地支援活動の提携調印式

メディア名	掲載・放送日	番組名・記事名
大分合同新聞(朝刊)	2011/5/3(火)	震災ボランティア 大学生が学生後押し
OBS	2011/6/13(月)	OBSスーパーニュース
OAB	2011/6/14(火)	スーパーJチャンネルおおいた
読売新聞	2011/6/14(火)	学生が撮った被災地の現実 日本文理大で100点
大分合同新聞(朝刊)	2011/6/14(火)	被災地を知り 今、考えて 文理生らが撮影写真150点展示
毎日新聞(朝刊)	2011/6/19(日)	被災地写真200枚展示 日本文理大山下さんら撮影
朝日新聞	2011/6/24(金)	大学生が被災地写真展
朝日新聞	2011/10/8(土)	学園祭タッグ名産販売 日本文理大ワカメなど海産物 石巻専修大「愛のカボス」1000玉
TOS	2011/10/20(木)	TOSスーパーニュース
OAB	2011/10/20(木)	スーパーJチャンネルおおいた
大分合同新聞(朝刊)	2011/10/21(金)	被災した学生を支援 文理大が「絆プロジェクト」
読売新聞	2011/10/22(土)	被災地の大学がカボス販売 文理大生が発案、送る 大分では石巻の海産物
読売新聞	2011/11/7(月)	きらりん 学生と一緒に被災地支援
大分合同新聞(朝刊)	2011/11/8(火)	ひと「絆プロジェクト」に取り組む日本文理大学人間力育成センター主任高見大介さん
石巻かほく	2011/12/8(木)	石巻専修大 石巻市に11万円寄付 近藤特命教授学生たち 日本文理大と連携
OBSラジオ	2012/3/6(火)	村津孝仁 朝惑ラジオ
NHK	2012/3/8(木)	NHKニュース
NHK	2012/3/8(木)	ニュースTodayおおいた
NHK(全国)	2012/3/8(木)	ニュースウオッチ9
OAB	2012/3/8(木)	スーパーJチャンネルおおいた
TOS	2012/3/8(木)	TOSスーパーニュース
TOS	2012/3/8(木)	TOSニュース
OBSラジオ	2012/3/8(木)	OBSラジオトピッカー
大分合同新聞(朝刊)	2012/3/9(金)	明霧地区で清掃活動 おのの「湯の花」へ被災地へ 日本文理大生が復興支援
朝日新聞	2012/3/10(土)	被災地温める湯の花 文理大生が送る計画 清掃奉仕、温泉旅館から提供
西日本新聞	2012/3/14(水)	日本文理大生「絆プロジェクト」湯の花が被災地へ
OBSラジオ	2012/3/14(木)	ごくらくワイド
石巻かほく	2012/3/16(金)	学生の支援活動 捜索 寄付や学習ボランティア 石巻専修大が震災DVD
OBSラジオ	2012/3/18(日)	飛び出せフレンザーズ! なんでもかんでもランキング
朝日新聞	2012/4/5(木)	大学発福島の子に元気な夏 文理大、キャンプ招待講座設置学生ボランティアに単位
読売新聞	2012/4/5(木)	被災児童支援へ実践講座 日本文理大学生がキャンプ企画
大分合同新聞(夕刊)	2012/4/5(木)	被災地の児童招へキャンプ企画・運営 携わる学生に単位 学生ボランティアセンターと提携文理大が実践講座
朝日新聞	2012/4/22(日)	被災児童招へ講座 日本文理大企画・運営学ぶ
大分合同新聞(朝刊)	2012/4/22(日)	文理大で講座始まる 被災地児童受け入れへ 活動内容を協議
読売新聞	2012/4/22(日)	学生、被災地の現状学ぶ 日本文理大 児童支援へ第1回講座
OBS	2012/8/16(木)	OBSスーパーニュース
NHK	2012/8/17(金)	しんけんワイド 大分
NHK	2012/8/17(金)	ニュース845おおいた
大分合同新聞(夕刊)	2012/8/17(金)	日本文理大 あゆみプロジェクトスタート 被災児童大分を満喫
朝日新聞	2012/8/17(金)	日本文理大、福島の児童招へ 学び重視のキャンプ
OAB	2012/8/19(日)	OABスーパーJチャンネルおおいた
TOS	2012/8/22(水)	TOSスーパーニュース
毎日新聞	2012/8/24(金)	被災地児童招くプロジェクト 日本文理大 子の笑顔で成長 学生が企画考案、入念に準備
SANKEI EXPRESS	2012/9/17(月)	ボランティアは被災地通信 南相馬の子供たちに夏の想い出Vol.23 大分の川や海ではしゃぎ
TOS	2012/10/27(土)	未来の力になりたい~東日本大震災復興支援 「あゆみプロジェクト」~
大分合同新聞(朝刊)	2012/10/27(土)	未来の力になりたい テレビ放送紹介
産経新聞	2013/1/23(水)	大学これ新た 日本文理大学②人間力育成実社会たくましく生きる

**毎日新聞 2012年8月24日(金)**

**被災地児童招くプロジェクト**

**日本文理大 企画運営する**

**学生が企画考案、入念に準備**

**子の笑顔で成長**

**毎日新聞 2012年8月17日(金)**

**被災児童大分を満喫**

**日本文理大 大分の川や海ではしゃぎ**

**あゆみプロジェクト スタート**

**朝日新聞 2012年8月17日(金)**

**学び重視のキャンプ**

**朝日新聞 2012年4月22日(日)**

**被災児童招待へ講座**

**日本文理大 企画運営する**

**学生とともにレクリエーションを楽しむ被災地の児童**

**南相馬の子供たちに夏の想い出**

**SANKEI EXPRESS 2012年9月17日(月)**

**ボランティアは被災地通信**

**南相馬の子供たちに夏の想い出**

**Vol.23 大分の川や海ではしゃぎ**

**道がないバス**

**Gakusei**

**朝日新聞 2012年8月17日(金)**

**被災児童大分を満喫**

**日本文理大 大分の川や海ではしゃぎ**

**あゆみプロジェクト スタート**

**朝日新聞 2012年8月17日(金)**

**学び重視のキャンプ**

※各掲載記事は許諾を得ております

私があやみプロジェクトの思いでは、電用の滴に行つたことです。初めて天然のウオーリー・スライドが出来て最初はこわかたけれどからだん慣れで楽しかったです。後から重ふろさと自然学校では、三日目にビザ作り、六日目にビザを作りました。三日目作りのビザ作りは、夏野菜をサボテン、私は、あんまり野菜が好きじゃなくて実はあんまり食べたくないが、たゞど自分できじを作つたり野菜を切つたりして作りました。ビザはすこくおいしかった。ビーマンシやなすはまらいたつてど食べれた。

六日目のキャランカでは、カレー作りをしてしまは火担当ですごくつかれてしまふ。しかし、どうぞくおいしかった。キャランカアフタア

イアーニは、タンスをひとたり、501山をやりとりしてすこく楽しかった。

その中でも一番の思い出になつたのがうみたまごです。セイカラのショリでは、流星か

(2) 6年  
新聞  
た。鰯内の魚はすごいこれだ。た。  
私のスタッフとやりたいことは、福島に来て  
福島のめいしょなどを見たいです。理由  
は、私たちが大分に来て大分のめいしょなど  
を見せてもらいたから今度は福島に来てめいしょ  
などを見てもらいです。理由  
一 調査本当に大学生に庄あせりになりまし  
た。感謝します。



## 保護者

## Q1 お子様にどういう経験をさせたくてあゆみプロジェクトに参加させましたか？

- 静かな性格なので他人とお話しをしながら自主性を伸ばして欲しいと思い参加させました。
- 離ればなれになってしまった仲よしと一緒に過ごさせたい。九州ならではの貴重な経験(のびのびと)をさせたい。
- 原発事故以降、外で思いきり遊ぶことが出来なかったので、自然の中で活動させて参加させました。
- 福島から離れ、放射線を気にせず、自然の中で思いっきり体を動かして楽しんでほしい。
- 大分という遠い地に7泊の長い間、親元を離れることにより精神的に強くなってきて欲しいと思ったから。

## Q2 お子様は、あゆみプロジェクト参加後、変化はありましたか？

- 色々な面で、積極的になりました。自分の事は自分でするようになりました。
- 大人になったような気がします。家の手伝いをしてくれるようになり、中でも料理を手伝ってくれます。
- あまりにも楽しすぎて、福島に帰りたくないという感じだった。人前で泣かない子だが、感動のあまりに泣いてしまったということを聞き、心をゆさぶられるような経験をしたのだと感じた。
- 大分に行く前は、自分勝手な所がありましたが、大分から戻って来てから、人を思いやる心を持つようになったと思います。
- 今回のプロジェクトがきっかけかどうかは分かりませんが、その頃から、以前は少しおこられたり注意されると、すぐに怒り、だまってしまう事が多かったのですが、今ではとても素直になりました。

## Q3 あゆみプロジェクトに参加させてよかったです?

- とても良かったです。大学生のお兄さん、お姉さん達を自分の兄姉のように接して馴れ馴れしかったかと思いますが…。スマセン。4兄弟の末っ子なもので、川遊びはなかなか出来ないので楽しかったようです。すべてにおいて楽しく過ごさせていただきました。
- 子どもたちと離れていた間に、親として、これからできることをいろいろと考える時間が持てたことは、とてもよかったです。

## Q4 お子様はプロジェクトに対してどんな話をしてくれましたか？

- 初めて出来た友達と宿泊した、ドキドキ感を目をかがやかせて話してくれました。
- いろいろな行程があったと思いますが、一番は「大学生と行動した」ということで何をやっても楽しかったようです。



## 子どもたち

## Q1 あゆみプロジェクトを経験してどうでしたか？

(つらかった事・楽しかった事・嬉しかった事など自由に書いてください)

- いろんなイベントがあって楽しかった。(特にスライダーやピザ作り)、みんなと(スタッフ・大学生)話したこと。水族館もよかったです。つらかったことはみんなとお別れ!!でもまた会えると聞き嬉しかった。
- たくさんのこと学ぶことができたし、自然にふれ合うことができすごくよかったし、スタッフと交流できて楽しかったです。
- キャンプとか草原で遊んだりとかキャンプファイヤーがすごく楽しかった。
- 日頃あまり遊べないので、ストレス発散になって楽しかったです。
- 初めてウォータースライダーをやったり、キャンプをしたりして楽しかった。
- テントを張って、テントでねてみたかったです。ひしゃぶりに外に出て、思う存分体を動かすことができて、嬉しかったです。最後まで、大学生が空港で見送ってくれたことが嬉しかったです。

## Q2 あゆみプロジェクトはその後どう役にたちましたか？

- 勇気づけられた!自分で考えて行動(人のことも考える)、チャレンジ精神がついた!
- どういうとき、どういう行動をとればいいか少し分かるようになった。
- 仲間の大切などを学んだので、仲間をより大切にするようになりました。

## Q3 プロジェクトを終え自分が成長したと思う事は何ですか？

- 何ごともチャレンジし、時間を守るようになった!
- イヤな事があつても、また会えると思えば何でも勇気が出るようになった。
- 知らない人とのコミュニケーションをとることができたようになったこと。

## Q4 学生スタッフの印象はどうでしたか？

- みんなおもしろい。いつしょにいると楽しい。
- おもしろくて、やさしくて、ずっとつながってみたいと思った。

## あゆみプロジェクトメンバー

### 後列左から

経営経済学科 1年  
**奥本 達彦** (オクモト タツヒコ)  
岡山県/市立岡山後楽館高校出身  
経営経済学科 1年  
**在間 通浩** (ザイマ ミチヒロ)  
愛媛県/県立西条高校出身  
経営経済学科 1年  
**須賀 流星** (スガ リュウセイ)  
大分県/日本文理大学附属高校出身  
**高見 大介** (タカミ ダイスケ)  
NBU人間力育成センター 副センター長

経営経済学科 1年  
**春藤 嶺太** (シュンドウ リョウタ)  
大分県/県立鶴崎工業高校出身  
経営経済学科 1年  
**柏 雅也** (カシワ マサヤ)  
大分県/県立大分鶴崎高校出身  
経営経済学科 1年  
**上田 大輔** (ウエダ ダイスケ)  
岡山県/吉備高原学園高校出身

経営経済学科 1年  
**三代 雄大** (ミシロ タケヒロ)  
大分県/県立情報科学高校出身  
経営経済学科 1年  
**高橋 大地** (タカハシ ダイチ)  
大分県/県立情報科学高校出身  
航空宇宙工学科 1年  
**福島 伸明** (フクシマ ノブアキ)  
茨城県/県立勝田工業高校出身

### 前列左から

経営経済学科 1年  
**佐藤 勇太** (サトウ ユウタ)  
大分県/県立大分鶴崎高校出身  
経営経済学科 1年  
**山本 久留実** (ヤマモト クルミ)  
宮崎県/県立富島高校出身  
経営経済学科 1年  
**櫻田 聖人** (サクラダ マサト)  
神奈川県/県立寒川高校出身

経営経済学科 1年  
**小野 雅季** (オノ マサキ)  
大分県/市立別府商業高校出身  
経営経済学科 1年  
**進 夏希** (シン ナツキ)  
沖縄県/県立南部商業高校出身  
経営経済学科 1年  
**寺原 卓哉** (テラハラ タクヤ)  
大分県/楊志館高校出身

経営経済学科 1年  
**佐藤 綾香** (サトウ アヤカ)  
宮崎県/県立延岡商業高校出身  
建築学科 1年  
**宇都 真太郎** (ウト シンタロウ)  
鹿児島県/県立薩南工業高校出身



## あゆみプロジェクト支援団体

**日本財団  
学生ボランティアセンター**  
〒105-0001  
東京都港区虎ノ門1-11-2  
<http://gakuvo.jp/>

**独立行政法人  
国立青少年教育振興機構**  
〒151-0052  
東京都渋谷区代々木神園町3-1  
<http://www.niye.go.jp/>

**特定非営利活動法人  
メックス**  
〒342-0005  
埼玉県吉川市川藤103-1  
<http://npomex.com/>

**一般財団法人 セブン-イレブン記念財団  
九重ふるさと自然学校**  
〒879-4911  
大分県玖珠郡九重町大字田野1624-34  
<http://www.7midori.org/kokonoe/index.html>